歌合歌

佐家撰歌　新古撰歌

八月十五夜

八

明治文庫

御室撰哥合

正治二年三月五日

内閣文庫

内閣文庫

當座

題

春　夏　秋　冬　雜

作者

御作　守覺法親王

入道左大臣

權中納言藤原隆房

中宮權大夫藤原公經

右近衛權中將藤原兼宗

入道皇太后宮大夫俊成

前宮内卿藤原季經

權律師　賢清

右京權太夫藤原隆信

前中務權大夫藤原有家

左近衛權少將藤原定家

上總介藤原家隆

阿闍梨顯昭　　阿闍梨覺延　　沙弥生蓮

阿闍梨禪性　　阿闍梨勝蓮　　沙弥寂蓮

判者

入道皇太后宮太夫俊成　　後日付進判詞

一番　春

左　勝　　御作

谷うもるそなたの風さえて清き道にも散る梅の下水

右　　入道左大臣

墨そめの神のはふりの梅の花ひとそすさまし

すさまじの神のはふりと侍るとかやこれ世ばなれ

いとうる人のはうまつりのそこれ侍りとそこそ

まてても老の情もたれ侍りもさもあれ八雲

ふる雪の下水も知りてこく侍りて一番左大以

可為勝負

二番

左　　拾遺納言為原隆房

ふる野やき雲をとそあれぬ白雪の清るやむの程よりこそ

右　勝　　中宮権大夫藤原公継

よし野山よそにぬかりの花ならハ雲とやさとおもひそてまし

左右ともに吉野山乃風情花の振よろしく雲をそり
まかつるいつれも只姿詞さまへりくして勝劣みえ
まうれ侍るハ持まいそハとや侍しを右方の人よ
雲とやおもひなしてまし　かしとまうりて
侍りなと方ひさやさふらく勝侍りぬ

二番

左　勝　　右近衛権中将藤原兼宗

おしなかる狩見る人やまよはなん吉野の奥の花乃盛に

右　　入道皇太后宮大夫俊成

新勅撰
桜ちる春もすすむしむにそむしまて人そとひける春の夜の月

此番右の哥も愚老が詠にて侍りけり月やあし
ぬしやむかしのはるならぬ乃左中将の歌の古
ことをとらへてひろひあつめたるそうりよろしく家
ちかく入たるかひしともなく侍れハよし野乃奥の
花乃さかりやまさしとして以左為勝

四番

左　勝　　宮内卿藤原季経

よそひくる梅乃あたりに吹風ハつらき物からなつかしきかな

右　　権律師賢清

春もなを霞乃そこにまかりふくりを離せしとやまへの里

山里にありせし深山辺のさとハ長くや侍るよし
申侍しを梅乃にほひふくそせるつらきものから
なつかしき詞とも心も哀をとりて幽玄にこそ侍
らめと侍しかハ勝の字を付侍りき

五番

九

胡戸あまてまうつそとうむまいもあへぬ當乃あ

太夫　　お中務　檀方更茂系五系

かさとりあかつ月萩のうつ物のうつ風

あさ戸ゆくあつひをあへぬ當乃あをを中行ん

さめつつつぬ風情あまり耳あれて行うへ

雲ゆくとをきてあかつ月萩乃ゆうつ物といひく

かのふうりといつまてあつくあり行れハ

太夫まくあ行へきうつ中行うハ中京檀方更

茂系乃ゆうれていく上白まてあつと五て

下白まかれとあくハ例の儘乃白まく行ととを

回乃病まてや行うまいとやうれうハ人とも

さかとうやや行うんとやうれうまあ恋光ゆ行

を縅とかのとを文まを回信乃病まを行うを天地

乃ゆ合うも中務ゆ ゆまを乃萩乃月と面行

あおおれうさふかのうあもひんむとうてあつう

それも指まうあうれ行うゆ回病乃泥ゆ

やとや行へハさうにいまへもさうまく行

うへをとゆ文ゆうとうとて揚まれ行れ

六番

九

隆信

うさうハうてもんとまくさめまもうる雲まのうう白を

太夫　　五系

雲ゆうちハてをとうさうぬあをあをもまをせう海ゆ

太夫まをせう海ゆ白河乃さとハ揚行へうとやて

勝の字を付侍りき

七番

左 おう　　左を乗捻が將菊原宗家

うらひとハあけともいまこそ右の雪のまつこゑまちとやハ去る

右　　上総介菊原家俊

ふきぶ野となるあき秋の侍もの霜あるその萩乃焼原

右の雪の下草もうつめつくさきを野ぬ霞

めるこの萩の焼原もいとやさしく侍れハ和まこそ

とをのくやさしく侍りき

八番

左 おう　　宗家

刈ものこよろ侍かもこもこ乃侍の月のこゑとろんとろふるん

右　　家俊

花ちりてこそてこそのうき雪もうつるつるこる雲乃明かれ

此番勝劣いとかしくこそこそ沙汰の侍とや

侍りしハ左右の言葉侍まこ雌雄難決しく

勝劣みこと侍りハ為

九番

左 勝　　阿署梨那昭

雲風乃あきけあこそハ梅乃もさきぬ宮まこそかハ山やい

右　　阿署梨稼性

いはりとむまつ比乃ちめよハさそあこまこ乃雪の白雲

さそあこまこのこと乃こ雲めちまさりたふ

やうよこそとや侍りハ乃ふかやて云ハ白ハ去

年乃仙洞の御百そこそつこまつれまこ白ふり

とや侍りハ去年乃こと侍おされこうへき

左 緣よ宮あや作りぬ

十番

左 緣　阿闍梨緣延

うきまもあらしとなまふ三吉聖乃おくるもむれ菊と見えし

右　阿闍梨緣蓮

落紙見る折くことの心そうたとゝ世といきりぬ蓮

右 あまりまなおされうまもしくて作るふ敬乃あちち

もれハ劣とや作りぬ左ハうろく作り

十一番

左 お　沙弥生蓮

なくさめ〳〵を乃ちめも絵よりる霧よこむるやさ〳〵乃宮

右　沙弥寂蓮

三風やさそひそて川と思ふんむもちまる梅乃白ひを

霧よこむる深山乃さともんうたりてなく

むるもとやる梅のうちをひを見ておるやさく

折ふうう作るめし

十二番

左 お　生蓮

分いもそて川いふいあの世よむもあるて行ふ志とるめそ〳〵き

右　寂蓮

ひふる乃雲み浪絵よ数きそて友をそるゝ愛のうりあ

左 を分ハ拾つうり述懐のあろやさく右を

三乃ゝき歸乃よもうかさして優也る拾

十三番 文

左 お　御作

乃ふ乃ふ乃ふ人もゝし水宮瀬川あゝうやきの点ゝあゝん

右

入道右大臣

これもまた世をそむきぬるたちとてうき人ぬる墨染の袖
右世をいとへるとりてふ乃ことの葉も誠ハしめるよあらハ
是ハ作者さもあらハさらハ袖をや絞られけるき
と作者さもあらハさらハ袖をや絞られけるき

十の番

右 ね　　隆房

夕されハ秋のそらとうつりて月をそ結ふ袖よりの水

右　　公経

出よりの月や都のたつ人ゝて袖まゝをそうつる山郭公
右右あつまふあらハしてはとゝ

十五番

右　　兼宗

あつ夜ひとへよりたもとふもむのうのひをとゝめまゝ
右 擬　　俊成

續古今
よのひとゝをゝ擬乃神の寄つ西乃紅とゝ緑乃美
右同新みとて員てよりとへゝと名定やされけき

十六番

右 擬　　兼宗

むとちふもふ夜の月新てゝすれゆく秋やそむん山の井れ乃
右　　俊成

ちよもまゝよれちの世まてもはるゝひとゝなとりてよ
右ハらゝ紀人の月ゝを事ゝらねハ乃員

十七番

右　　季経

夜ふゝとゝやゝ原の夕すゝを秋よゝ紀多つ風乃吾ゝ

右 勝

たちのかるるをひともとのうさぎの宮ふきちぬるタ立ぞ

右下白ことそもそもそこ〜おりひ入ぬさまふ侍れともいさ

さらあらしうあるさ〜也たそ秋よさ紀うの風

恒京門に女房うつうまつる下白なりまてあ員

十八番

左 負

むらくもよそめ〜夜よまてちそ〜雨の独ハ立うつうとと

右 隆信

やさのくも雨乃夜たちうへてうさいひとへよ雨のたうを

たたく雨乃夜いつまもりくいひ〜つて侍うハ

愚意迷雌雄之篇只短慮忘優劣〻奥樞暫

可為持紀

十九番

左 定家

ゆふくれの乃杉の下風打そよ紀ふ三稙乃山年

右 勝 家隆

なつ夜うふとうれうくさくむ乃雲をたよ白へ同〜かくふ

ゆふうも雲よをうれうくとつ雲たうまつまふ

かとめつ〜くまをそよみりへおの〜うん白と

くうれうまくやさ〜く侍れハたそとくの歩法

よをうひ侍うに以右為勝

二十番

左 負 雅経

五月雨のよりとの心やうつうん聖平乃法あうむ人の色

右 雅経

むらさきのそめぬたりといふらんとやいふる
ためつゝうゝに太きさゝのゝさちまあれとも
さゝちよ入乃とゝ乃つゝうまつり出られしる風
情ありとゝ乃物

二十一番

左　　兄延

古に乃あとを乃もてゝ乃ゝ乃れハ春をもふく歳ゝ乃葉

右　勝　　勝葉

郭公をゝちゝく声をいつゝ乃ハ人のもつてふ物とゝたゝん
右信よちゝさやうなる事といひ一まる風情なち
とゝく乃勝

二十二番

左　　生葉

寒ふとゝいふもゝと野に初ゝるあやめ草秋よハ雨ゝ引結ふらん

右　勝　　寒草

やゝ信よ岩ゝとる水のいゝ川ゝりと秋をふゝりと秋をふゝる武
左をめつゝ一さちまふ伏れとも右岩ゝとる水の
伏りを秋をふゝりとゝ乃をゝ乃ゝ乃ゝ
ゝくゝとゝよい真ゝ乃ゝ
免勝字平

二十三番　秋

左　勝　　沖作

たゝちゝゝゝんをゝてあちゝさゝゝくあゝぬゝれのゝをゝ苦き

右　　入乃左左に

ゝゝよゝよゝ芝も神をぬまつゝと光の移ゝ乃程ハゝりき
光乃ねゝあの廉のゝよをゝゝゝれ伏ゝん

やさしきふしまちくいとあるくいたれともん
七夕まちをうしてあるぬるれのうそまくる
しさ風情むしうちりあかくあれてこの夏の月
出ともうる風情いつこまおまりうるとやさし
くみこ伝れを伝ふ子細をうひ伝ふたをを
縁とやせり

二十四番　左　縁　沖作

あさ引を苔ふ系ふ神ぬまて霧とあろせさ源芝ふ星

右　歌仙

うへをさし萩の盛をふつるふ初りふまあ小あらうり
たいうあ〜く伝るあり右をむ乃ろうるまた山本
乃さうなれいいうくさ立ろうひ伝ふん

二十五番　左　縁　沖作

野へあういあうもむ庵ふうさまう我とちりある庭乃あさ萩

右　歌仙

秋の行いふんをうけふうくふ程のむふ庵乃なく庭ん
たをいはこ乃姿ふりやさ〜うて深風情於〜入毎
入之紅堂霧何於子顆万顆こ珠姿をふ主八暁の
月乃ふうそふかけあさ意をとふへを秋の行雷れ
中ふまうひあ〜ふるめてあ紀沖雷ふ西光さ
のこ摧系伝ふく町ふて面目乃あ紀を義こ伝りぬ

二十六番　左　沖作

月ふふて〜いさ〜ハ秋をあ〜こんむさうてもとろ紀霧の命を

右

雲ハあれども人を出る海ゝ乃聖家の芸ようつゝ明地
あれも九ゝとひとくめてあさけまふ伝て耳とや
ちゝ業とあれるを九いとやさゝく雲ハあまつく
といるより聖乃芸よ熟ちく あうまてもゆ言
くあゝて伝れハ太の猪乃猪ようとと作おさ
しゝも作ち九ゝりよさゝりの事よ伝ゝ
ちとゆ海ゝハ為物

みつ乃

一十七番

九 おい

きりくとうゝむるあうそゝりあるゆく秋の心つゝさ
右

ちひきゝもやて聖風の色あれいひゝり露ゝさ女ゝ物代

隆房

公純

九ゝ芸以猪ようく世各麗芸ゆゝ為物

二十八番

九 猪

雲ゝるゝりちれゝふ月宮ゝ夕月宮出ゝを人ハまゝ世ゝりゝ

亀宗

右

月をおりふまゝ紀んとてゝ見よとゝん宮も秋ゆとハすゝ

秋河

九ゝそゝやゝゝく伝れ太例のあさゆゝをふゝち

月ハゝくひゝさゆゝ人ゝ

二十九番

九 おい

秋乃芸ふよ風の芸世ぬゝ夕されハ秋ゝもあれハさゝりゝゝ

雪絶

右

ちよあゝてゝまれよたのむゝ一秋ゝふ物文よゝり星合の宮

賢法

萩の夕風もめつらしくやさしく侍
る一樹の七夕も山ちかきふもとの谷の仍お
とゝ侍らぬ

三十番

左　隆信

萩の露ちりかゝるまでとゝまれる秋萩乃風ちりかよもとゝ人
左勝　みつのぶ

萩の葉乃そよ〳〵ぬれのごとくなられも露ゝ露れて秋の初風
左　萩おもゝ〳〵ふ〳〵なるを左の下白れやさ〳〵き
ちりなりてゐ勝

三十一番

左　お　隆信

芝ゝ〳〵踏とゝ見ゝ見ゝあ見ゝて〳〵鶯ゝ聖やふゝゝきの星

五葉

秋ゝゝ来ぬ庵ゝ尾ゝゝゝあゝゝゝ新まの新きあをゝゝ
左　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ちりゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

三十二番

左　勝　邦昭

清ゝゝ清見ゝ雲乃雲秋ちゝゝゝ月ハ見ゝゝゝ
左　みつのぶ

宿ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ雲乃雲ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
見ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

三十三番

た　　定家

里にあれてはるそともなる紀庵乃面のしあらの小萩花さかるらん

太　　家隆

新古今
五月雨乃月まつ屋乃神のよる人あめなる青のいなつさ

たとゝあくつゝまつり出て侍ると太さ雨乃月まつ

宿乃神のよる人たのめなるとゝさて霄の稲妻あと

いひてゝあるまてこゝにやさしくあしさ雪乃月

て侍れハ波法よをゝ[illegible]に昭太為

三十四番

た　　定家

雅とゝさくさゝれあるひ乃秋の花といひてもちしさと廉代あ

太　　家隆

秋ハ今ひとゝもはしクメくれのちめハのこゝ世界のこゝ

た乃三時白雪ゝ紀さゝ海ありとゝそ人もひんのゝ

太いとゝやさしく侍り仍為

三十五番

た　　邦昭

うちもれてはるゝ野へよハ出れとゝ乃ないとのゝいろく

太　　経性

屋ゝやいふまゝさゝせていなゝ蔦ゝゝそゝなく家れてゝ

たゝとゝのうちをあゝ[illegible]ゝ侍るゝ侍ゝん

三十六番

た　　邦昭

秋乃春九月と春乃こゝ家のゝゝ家と出てゝ人はつまゝ

太　　禅性

あゝとゝいゝゝ侍ゝゝ春ゝゝあるくなれ秋あゝ月ハ侍ゝと思ゝ

右共以ていとのれこの乃もとにあるへしゝえくゝへも
優乃詞よりはるかにおくなれも信よりゝ共以不て
あさ無れ

三十七番

左 お　顕昭

雲ぬれとあひしりしやあるこゝろ月ふるうれてたゝしの雲

右　禅性

あるの吹なるれたちちよ月さてはるゝ雲ふるの乃そゝ
あれも共よ義勢あれとも乃くちくあるとも引
出されくはれいあるは

三十八番

左　兵延

そのことゝゝぬ秋の雲ふるゝとゝあぬ聖へ乃ゝゝへ

右　勝

ねぬ秋ゝこ清ゝ乃海のさとんや月よ夜をとうちあるにん
右のゝのゝゝくはゝくはゝ信めり

三十九番

左 お　生蓮

ゝとゝりや秋のゝ風宮を紀よかゝとあ宮んあゝれゝ夜

右　薛蓮

萩のゝふよ乃ちゝゝ秋ゝ乃風ゝゝ宮ゝゝたゝ初信の夢
ゝゝよゝゝあゝゝのゝゝゝのあゝゝゝくゝまゝゝく
信ゝゝをあゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝれゝよゝゝゝ
拍とゝゝ信ゝれ信ゝ

四十番　冬

左　沛作

みるをのゝ紙いとゝをとゝをゝふみ〜とゝく山を衣をゝてをゝゆく

入道左大臣

右 勝

をゝれの野辺乃草〜紅をゝるむまい秋を衣のをゝめなりをゝり

たゝをゝ〜く侍れとゝをゝたゝとゝふやをゝ〜をゝれいは番いゝ

をゝも右勝をゝく侍るへきをゝりと被 仰出事

四十一番

左

をゝれ乃野辺の宮〜をゝをゝをゝるむまい秋をゝんへ〜むの侍とゝは

隆房

右 勝

山をゝ迄いを来はをゝ神をゝ人はをゝ物はをゝりふ月いをゝちをゝれはをゝ

公継

たゝをゝのをゝ侍〜く左大臣をゝんをゝよるをゝ〜入を左大臣の宮

をゝり会をゝく員事

四十二番

左

たつをゝをゝてをゝ人をゝもをゝ左大臣の宮ふあゝれをゝりをゝる宮の侍ふ

兼宗

釋阿

新古今

右 勝

ひをゝり月をゝ池乃水をゝをゝむ月のやをゝて神をゝもをゝうをゝりぬをゝる乃那

たゝをゝ〜をゝを右をゝもをゝをゝ勝をゝ〜なをゝ〜へく

をゝひをゝをゝりをゝれて被免勝字事

四十三番

左 勝

いをゝをゝをゝ中ハ吉野乃川の流をゝむをゝふ形やをゝをゝをゝをゝをゝん

雪經

右

宮をゝをゝふ人をゝをゝをゝをゝ月をゝ宮をゝ侍をゝ

隆房

家をゝ庭をゝ踏をゝ侍をゝをゝ庭をゝ侍をゝをゝつをゝをゝ

をゝく侍をゝをゝいをゝをゝ中ハ聖乃と宮て侍ふ

水やちとりあらんと侍るこそ無らいなくあるく
侍るとなりあひて勝よあられ侍りさ

三十三番

左 おな　　隆信

名をさあとたるこをたりをを見せかふれそとる山河の水

右　　為家

水多のうつもの霧を打たらふそんや風てさそまさうん
左右共に無勝負可為持歟いく侍るくうり
侍らんとそ見あるつる

三十四番

左 おな　　定家

あらなさの乃まのいくさ世書あるんあるふ思ひ乃面うりうせて

右　　家隆

ゆ〜秋乃月うち落もなくさまに雲の紛れあそすての山
左あらそまれとしのいくと勢とつ夢かさよて思
なもひ乃面うりせぬくさまるさ〜も答あるへさそて
を侍らに一の姿うてい侍れともうまし〜やと
ア出〜侍〜を何乃とそ〜ふへうんやさ〜くこそ
侍れとはさるよやさされ侍りさ右もあ〜くそんえ
侍れを又呂あ和

三十六番

左 勝　　那脈

水多の書系乃やさいい乃よさ〜て書そて白さ和の四九
右　　程性
海世よいさ〜もたてあて埋大の下にあれて行いさ〜ん
左を長ありてさる情ありと見を侍りを右を羽碎て

下劣なりと中四句あんをさだめまぎれふの山ぢ
のちをとゞめんべし

第十七番　左　勝　兼延

秋ぎりにたゞよひたちまぎれぬるかぜとやそこうけらん

右　勝　蓮

数なるべぬ家月のこゝろと思ひしよりやそこうけ
ん　右乃こゝろ下句こゝろくんねるべくんを作る山
路の雪のふりそてしるべやあるべくんん山路も
雪よりやそこうけんはあらぬもしらぬ作れを
さしてそこうけやそこうけ而い作るねとも以雖負う
定むれを雖あるふるうてた勝作りき

第十八番

左　生蓮

雲さびてそこうけ作るなまい何をまちてか牡いるべくん

右　勝　麻蓮

やさしくせ乃ちさへうくあり小ふり松をてうる峯の白雪
さしのちる雪何とやらんをへるよそる河ぞくそ
作れとも雪をてうる峯やさしく作れハ以右勝

第十九番　雑

左　勝　釋阿

玉葉　君ら代ハ千歳乃やさしの岩の室あまん胡の法りあまて

右　隆信

いたる日小ぎさしそふ君ら代ハ千歳ぞ
右出る日よ出をなるべる神代の氣色もいと目出
つるまつ生るを勝よあさるべきさしやお作しハ

右慈尊之出世三會之下曉於当者祝着何更
かゝる事高野之岩廟尤可被賞翫之旨再三
被仰出畏崇之幸り　あくかてとひくあく岩室
住うまつり出て侍るると一惶一喜且感
尤面目とこゝろあわれてし

五十番

左　持

照すらん君かるとも萬代に法のあるしと見ん後その月　五家

右　定家

君か代を高野の山にすむ月の待らん空にまかせて

左右ともにやさしく優美に見え侍るを右宮師
又可被賞翫之旨左方作者申侍しを今為讃
住うまつりあへく侍りつる人まかせ侍に今めを
高野勝あるらむも家しるらにとあらそひ申出て
侍しかハ不便なりとこそ伝侍しかともおすゝへて
猶ま申定侍ぬ老耄の見ゆ非をとゝきまへぬるや　相
似侍らんと見えてこそ侍らし

五十一番

左　勝　　御作

新古今
あらへて世をすむひハあるれとも憂まゝいつる命ありかり

右　入道左大臣

人なしふ承をそ出ぬさてもいなまうとのたを忘てこそあらめ
左右共にやさしくいうし姿ま見えて侍れともう紀
まつつる命のうかりあるくやさしう紀とや侍り紀

五十二番

左　持　　兼宗

前百今
世をとをつるかを行もあり
太

恋〳〵さもうの〳〵紀伊は恋〳〵紀ハあり
たうさをとう〳〵とハ
いとやさ〳〵く侍れを傷よ定めやすんとつうまつ
まるとうの〳〵さ伊は恋〳〵さハあれをうを
白河乃なうもんとう〳〵きりてあり〳〵くこそと面〳〵よ
ゆ侍〳〵うハさうふ物よまれあれ侍まう〳〵ゆ
侍〳〵ハ海山末乃をの〳〵のいや〳〵ゆ〳〵ゆ
いうふひうむあるへをと能因法師〳〵つうまつれ
おもひあハせ〳〵れあり〳〵や侍〳〵んとこそ云侍〳〵

五十三番
左 お

賢法

ほゆまきてあかく乃と〳〵いつ〳〵れも物をあ〳〵ぬ方をいく〳〵せうん
太

いうふてそそむさもやう〳〵ぬ世をあ〳〵ん人やハあ〳〵むゆやハそまあ
たををあひ〳〵ふ童部のふ〳〵ゆ〳〵ふ〳〵ふ〳〵
ていとやさ〳〵く侍り右ををまやうあ〳〵ていり〳〵ま
つを得失いまを〳〵乃をさ侍〳〵た紀系乃ををまやひ
侍りぬまハ皆為物

五十四番
左 お

おかう〳〵ハ世をもう〳〵〳〵遍乃〳〵ゆふ侍を乃ゆそつ〳〵れ
太

四ゆ〳〵ぬ〳〵ふの今の〳〵〳〵まふハ世をのう〳〵先をけくうゆ
乃太ハをやさ〳〵くう〳〵さ様〳〵やつ〳〵うまつまり

作去さまを楊員なる紀もうあしたるぬる作うり
たるめて人とやさまふやとやはいつもいつまと
やさしく作るを無まとやさまふく感あ方と
什妄一決と雖

五十五番

左　家隆

先たてしんもそいあしひさの山のあるうるさもうたるを
右 楊　邪脈

たるけしふうまし紀神ようるはや憂よあつるもあるし涙を
会方ぬと雌雄しふとと暑やはいるはいしとあし
いひしつて優寡あるりと感やされしうは悪光や
てさまと迷見形と程楊員と定後見もきしう
ふたとそはつひいるも毛を吹て病をとりとめ出作

とやはいるうはたたるるへしと作作しうはたいひ
たるまる姿いとやさしくはれとたもちるく優
寡あるりさりあるうたる山家よりをおもひ入く作るを
しあるさまるとやてんりりせりたを一節
うさを弱て因姿あるとうれしたれあるうるとうは
まあしくたられるはる山乃あるる入をある後
りりせるるもし今をとうは切まを作るあとや
作しうはるるうるく毛を吹まりてもあ出るり
と作まるはは以右あ楊はたあ員

五十六番

左　公徒

かとるるてあるへしへとりるるとはるもは憂力あるるる
右 楊　福性

何事よりいとまなきまて控ぬうき世をとふんるもまれそもひ法ふ
たをもんをてぬをて伯れとも左れ家あるろるもまれそ
回はるハ宮ろとさるを伯りとあしく左理さる海
つるくさまを伯れハ以左る侍

五十七番　　兄延

た　　侍蓮

うれ世ろと回ひしらたを中くるいとらぬ方をを恨さらは

太 侍

いとうひてとうひるうるう苔の神をむるまろ乃いうるくき
たるを苔よ世をハのうれるくうんの左よ源入らぬう
左同信左ハおまさうて奇めさるるうや

五十八番　　隆房

左 侍

ううめ乃家乃方のさまを苔乃神うるめるくふ回ひをぬを
ん　　事経
方をもちとおもふん乃るうるん後の世とさていふ世よさて
右をさしく伯りるくうん左苔乃神うるあるくふ回
毎ぬてとるるる白つ左やをうふ伯れハ左れ侍
しゅ宣き

五十九番　　賢清

た　　家蓮

いるうるよるるるる月日うれ後の世まてもうるくを方
右
跡毎えてなをうるさく山さとふるれるさくもをとたえまるう
たハ述懐乃をつく左をあらぬさまの山家乃ろ
を述懐るをれるるふんををるれハ準て可

為相卿を右方の作者に召さる一
さちよ山家をつくりまうし述懐の影よそむくら
員よりあられよりやや信仏ハさらさらく
ものとや仏を入れた府あるち雖ちまうハ
ちうゆらめうれ相ありと又や宣仏りき

六十番

左　　生蓮

新古今
ちうらへていろをいふもちまうし憂身の程をよそに思ひて

右　　麻蓮

ちうをいとふさへてあられあるあるものとや八月をやつくき
山番左右芸以殊よやきくはちふまつまりちう
きはと相宣平

愚点　四十六首

沙弥釋阿

勝員

御作　勝五　員一　持二
隆房　勝一　員二　持三
兼宗　勝三　員二　持一
季経　勝二　員二　持一
隆信　　員四　持四
定家　　員三　持五
顕昭　勝五　　持三

入道左大臣　勝一　員三　持一
公継　勝三　員五　持一
俊成　勝五　員三　持一
賢清　勝一　員二　持三
有家　勝三　員一　持六
家隆　勝三　員一　持三
禅性　勝一　員三　持三

覺延　　緣二　員三
生蓮　　員一　指四

勝蓮　　緣三　員三
寂蓮　　緣二　指五

新宮撰哥合　建仁元年三月二十九日

題　　作者隱名　　廣貞

霧籠遠樹　　羇中見花　　面後郭公
雲下曉涼　　山家秋月　　海上曉雲
嵐吹寒葉　　雪似白雲　　遇不逢恋

寄神祇祝

左方

左大臣　後京極良經
稱阿

内大臣　通親　　稱中納言宮使
誠子　嘉陽門院宴　　教信隆卿

左大臣中務通具　敬信公家　敬信保季
上総介家隆　寂蓮　鴨長明 祐宣長健男
賀茂季保

右方

女房 後鳥羽院
権中納言実家　権大納言雅具　権大納言定通
参議公経　大宰大弐藤光親
高倉院 修学院法皇 御先女　讃岐 二条院讃岐 式敦女　丹後 宜秋門院官女 頼行女
左大臣権中納言宣房　左大弁権中納言雅経
左兵衛佐具親　右馬助家長

讀師　左方　左大臣中務通具
　　右方　参議公経
講師　左方　上総介家隆
　　右方　左大臣権中納言雅経
別者　皇太后宮大夫入道釋阿

一番 霞隔遠樹

左 勝　　　　内大臣

こぎ出てもまだ遠き岸乃木のまよりて空への烟とよる霞かな

右　　　　女房

浦乃雲のいろやまさると眺むれハ霞ぞたてる志ほかまの浦

左の歌を右方より申云ニも乃梢を草の葉と見て歌への心のよわりと霞をとまりへのぼる心上下たがひてや侍らん 左方陳申云アしこに岸の梢歌へと見えけりハ あらに眺望乃ちからよりて詠出したるもの也 右の歌をと左方よりも申云あら 左の歌右難中古をもつてさ難にハあらむに右の歌まさり たるにもよらずも志候し 但かつハ一番乃左の歌なれハ勝とすべし

二番

左 勝　　　　左大臣

あさみどり沖つ浪まの春を海ひさしく見せぬ春霞哉

右　　　　参議雅経

新古 みわたせハ六田乃淀の柳原みどりもふかく霞む春かな

左歌を右申云上ニあさみどりとおきて下に見せぬといへる同心乃病かといふ 右歌を左申云みわたせハ六田乃淀とハよしの川といふ万葉集にもよみ侍り 柳いとむつまし乃淀よ詠める侍りやおぼつかなし 右陳申云六田の淀の柳をよめることあまりして侍るにや 左の淀を申 判者申云左の歌まさるべし しかれどもあさみどり乃詞よろしくひききたる右の歌むつかしの淀

にかつれし又おとるへし

三番

左　　　　　　　　　　　　　寂蓮

末とほき松乃みとりハうつもれて霧そ浪よするしほゝ原

右　勝　　　　　　　左近権少将定家

続古
さしかゝる入ぬ磯の松乃葉もみえつゝくもるかく霧立れ

左歌を右方申云末遠を現とをろうりもへてこそよろしぬれや右歌を左方申云松乃葉ニそあやまふかりしくまこゆれ判者申云見えらくなと云ふ詞ハふるきてけあれとよろしくそけふ詠とも末遠きといつるハまさるへしとや

四番

左　勝　　羇中見花

寂蓮

旅乃宿いく夜の空をなかめわひもまぬ苫乃夕煙

右　霧隔遠樹　　　前権僧正慈円

みよし野の山乃もみちも霧にへたてゝも見えす木の梢を空にまかせて

左歌を右方申て云ことなる難なし判断左乃よし申云右歌左文殊申しなかし判者申云左歌のもろこし難ありといへとも殊に花を思へる心もなくさうや右も又あさ霧のへたつれぬさま心侍りおとるへし

五番

左　勝　　羇中見虫

内大臣

ゆふ露も又さくらにも宿をとり夜をかさねゆくみちの山のせ

右　霧隔遠樹　　　左近権少将雅経

うら荻秋のゝらんをよそにみて霧ハうすき乃さとそて乃番

左哥ハを左勝ト有り　右歌左ハ云春の霞
乃哥よりハ秋のくもとをみるらしなくや
判者右をよしとて為勝

六番

左 勝　羇中見花　　　敬信有家

谷より吹てくむ風のさそふれも花よりつる北山路なりけれ

右　　　家隆

古への年よりおもひぬるなかめ乱花ちるらし比乃うつのやまこえ

左哥右ハ云吹きんといつる風のさそふれ耳よりも
てきこゆるふや右歌左ハ云なかめぬといつるな
かむれをなくくてうつくしきるんなかりて侍れ
なかめとふ物乃あやうきやきこゑらん　判者
ハ云う川のやましたく伊勢物語もつたへて左

よりてまことそハ云むれ花ちらしとなかめさまさや
さつらん右方人当時桜おもへくきせさるよし
陳ハせともなかめこそんのゆへとて持とな

七番

左　雨後子規　　　左近衛権中将通具

むらさめ乃なるく雨よりに時なく月にちまりさくの一声

右 勝　羇中見花　　　雅経

新古

岩のうへさくるやまとを捨てもいくへ乃霞の立て雲

左哥右方ハ云月影ちきると八いつちきおくより
右歌左勝なきよふそらしきよしとや　判者
右をもて勝とて

八番

左 持　雨後郭公　　　内大臣

み釈こゑはそれまふをとつまて雪と秋とを野乃さちいれ

右 羇中月也　　お大伝西遊記

ゆきぬれてくれてこのくかつと衣むの雪とはあるいとを

たこの月面乃ふれるふといつる事又も

ありぬへきやうや面より後のんよいいてたゆ云時

るれといつるはこの乃事あり右

雪乃中云 蕉乃ゆんかさやや又文ものよきちふ

とこふきあるこにやそくん判者云たこの雪ふれ

ま雪をとゆれとこ面とこをさるこぬるやたこの

あこて桜乃をとこあるもかこ雪乃こえようとせ

一対乃この世歌のさこもゆうよ中の中ふはかちと

さこあこ新くとたる紙こ雪乃こう日数とたるも

らてあこひこつよ遊猟の遊戯なれは羇中の新

よは不叶やとゆとたる方又ゆ云時ろといつるこう

つふこ面れ後よもちんすいて後へきすて

まの字はこの川の事乃あひさよいたるこ

これは面やこめるころはゆとゆふこうて又

おるこ

九番　面後郭云

右 月

ささこれをいとふとゆこよ子釈人よまこれて月を後ん

女房　　右天に

右 羇中月花

風ふきは芸は浪とおとあこまこふまこ猿乃こと芸の石山

たことのふゆ百ゆ　判者とかふおゆころくき

ここ後りたの月を後ちころたの芸のあことふ

ちてここ後ちとておるこ

十番　面後河面

左　　藤原家経

[illegible]　　[illegible]

右　縁　　讃岐

新古　[illegible]

[illegible]

判者同以右面縁

十一番　松下晩涼

左　右　　敬信隆信

[illegible]

右　　大宰大弐紀光

秋やとき風やさそふ[illegible]

左方申怯又如[illegible]判者左の夕涼[illegible]

くさ[illegible]ゆふ[illegible]や仍為[illegible]

十二番　山家秋月

左　縁　　通具卿

[illegible]

右　雲下暁涼　　参議[illegible]

[illegible]

判者申云[illegible]

[illegible]

十三番　山家秋月

左　縁　　左大臣

新古　[illegible]

右　松下暁涼　　お[illegible]

[illegible]

判者申云たゝ哥陰云接雖有枝葉之〳〵ふかち
てゝ為体

十四番　澄上暁霧　　檜中納言定綱

九　　丹後

ゆてるや浪なきうみの小雲こめてやうやくあけぬる月

右　体　杉下暁源

すゝしさは雲の面なきよさはにてしまこゝぬ秋のタくれあそ

九中云たゝ哥たゝ宜侍以承伏　判者申云たゝ哥陰

云指雖有奇宜仍為体

十五番　澄上暁霧　　内大臣

九　　お

ゆあらう雲乃絶まふふかうさにてこゝさゝあれゆくそのなかゝ

右　杉下暁源　　檜中納言通具

又まつれ秋の月なとさふたてたなとにうつる雲の下色

判者云ゝちのうゝまつるのふそゝまとゝもたゝ

ゝうゝ事なれハ指とに

十六番　澄上暁霧　　通具卿

九　　ゆ

ゝうれ神やいなくゝと雲のてゝうゝ人なとふ出ふゝ乃月

右　体　山家秋月

新後ゝ月ゝ月ゝ神の面乃雲ゝ秋の秋彩をやまのゝ

右中云たゝ哥ハ只ゝゝと秋月ゝ出ん也暁霧乃てゝて

ゝ影乃如何九云中有判者云たゝ哥ん可九

ゝうゝ事あり仍為体

十七番　嵐吹雪　　内大臣

九

秋ことにあらしの風をおくるなるあしの葉の乃久号

右勝 山家秋月　　宗砌

高台人ことにてもしかの家のうちんはたちの月をもちゐる

判者云右勝

十八番 嵐吹寒草

九　　教行

とことゝ原野まの嵐をとゝとゝもふるの寒ハ行むもひとゝ

右勝 山家秋月　　女房

五葉

家のうちやさゝをさひきやうへの月ハく風よさをとゝふれ寒

右やう云右のとさいゝハ色ゝぬ物なれをうまてゝ

寒のよあゝとやう右やう云さゝハ寒の世みゝハ宮をゝれハ宮

寒のにをゝとゝちゝ世をゝ寒ハ宮

ゆりゝ乃寒ゝとゝ中　判者云右ゝ寒のゆれ

十九番 嵐吹寒草

九　　保季

山風のかれ野の草にうちなびき寒の根ハ結ひもの乃

右 山家秋月　　雅経

ゝをふみ宮ゝ乃奥の若草あて横ゝ乃ゝ山のを乃間

右やう云寒乃寒のゝゝ見ん寒とハ拍をてぬ打ゝ中法

色ゝん判者云いつれを云殊事ゆ勝

二十番 嵐吹宮草

九　　誠忠

さゝゝ又秋ゝものゝとあゝゝ乃霜ゝれゝゝ嶺乃ゝ紫と

右勝 源上臈宮　　お稚信西

うゝゝ宮乃河とゝもゝゝ四の月ゝゝあゝゝ乃ゝれゝ

右やう云嶺の下宮と秋ゝもゝゝとハいゝゝふゝあゝ

うたゆ云あはれを又うかへにあり判者云うきゝ霧
もこし耳に馴ても歌のさまし宜仍為勝

二十一番　嵐吹寒草

左　　左大臣

あさぢ原ちりて後はむすびしもおきやきえしよはれ野の草ふく嵐かな

右勝　湖上暁霧　　女房

新続古
志賀の浦やよそにてる沖に霧こめて秋もおぼろの有明の月

左方申せんには判者云左右歌殊以深心肝左又ゆう
ありと以ても尚以右為勝よし申之

二十二番　雪似白雲

左勝　　内大臣

雪とふる山は月とながむやながめやらんいとひまなくてそ見ゆる白雲

右　流ゝ之暁ん霧　　右の歌脱不去

なみ路の海やうらつたひ引霧のまよひにみえてこきくる舟のほ
右歌のひとへに先達の百首の御製に似たり仍左勝
一方為勝之由判者申

二十三番　雪似白雲

左持　　寂蓮

あらし吹くみよつれなきにあまる雪のふるとゝかれぬ松の雪哉

右　嵐吹寒草　　宮内卿

かきちるやおもるも末の冬の霜をさそふるよもに吹あらし哉
左右無ひよろしき之由申之判者云以優持
一方為持

二十四番　雪似白雲

左　　釈阿

古ゝハさゆる雪とやみよしのゝ吉野の山のおくの谷の志ろ雪

右 嵐吹寒草　　乾光

[illegible]

左 [illegible]　　為條

二十五番　雪似白雲　　重保

左

[illegible]

右 嵐吹雪等　　女房

[illegible]

不及左右以右為勝　　判者申云

二十六番　寄神祇祝　　円方

左 [illegible]

[illegible]

右 嵐吹雪等　　権大納言[illegible]

[illegible]

判者以左為勝

二十七番　寄神祇祝

左 [illegible]　　左大臣

[illegible]

右 雪似白雲　　宮内卿

[illegible]

判者云以左為勝

二十八番　遇不会恋

左　　新蔵

[illegible]

右 雪似白雲　　女房

風雅

[illegible]

[illegible]

二十九番 遇不合点

新後撰 九條

泊瀬川又ゆくすえとなりたのめしの四つもつゝ二ゝとなれば

右 寄神祇祝

山家問て

[illegible]

別者以右條とをくさゝゝやをとをとゝもふをを

この條らをやや條也

三十番 遇不合点

九 歌仙

いとゝもんの[illegible]

右條六寄神祇祝

女房

神風や[illegible]

右寄祝ふゝりてこの條ゝ也別者やゝ

三十一番 遇不合点

九 ちの

[illegible]

右條寄神祇祝

嘉園

[illegible]

以右條のゝ別者[illegible]

三十二番 遇不合点

九 おの

初古

[illegible]

右

川 丹後

[illegible]

寂蓮

左右たがひにふるまひをかしくて判者あ負共以
優也勝負さらあやまりなし不及

三十三番

左 勝 内大臣

同 あしひきの山ぢ分入とりつゝめてさらしてとなるまさせとや

右 宮内卿

人もとがめとハぬ井の月さやかにすみ渡れぬ神のあそびとふる雪

判者云右の雪ふるゝとゆれとなをまさる

三十四番

左 勝 左大臣

續古 たつたゝ山ゝとりもぬ人あまりこと物うへてを牧山めを乃月を待ら

右 具親

あつまこゝ人あまりて海士をつりうへ〳〵とハ思ふらやいせ

左方申云右歌宜とのへとも是をなをひてハ左勝

勝負判者同

三十五番

左 権中納言公経

さゝなみ山ハ月をもいとひつゝ涙をとゝ〳〵いくもゝ

右 勝 公任

新古 あしたゝ山のゆきとゝ乃ゆゝとも見ん人もとゝ〳〵の雪をとゝめれゝさゝめん

右方勝 左方たゝひをやゝ判者同

三十六番

左 勝 通具卿

同 ちりさゝゆあぬるゝふる雪をとゝ〳〵ゝ時をとゝ乃ゝ見んとれとハ

右 宮内卿

うゝ見てもあるゝ神ゝれなをとゝ乃のゝをとゝまの磯乃雲ゝ乃ねを

左中ノ云右亭遇てあらぬ点乃ちろおかつる所
判者云以九この為勝

九

左大臣　七首　勝四　持二　負一
内大臣　七首　勝三　持三　負一
公徒ロ　二首　負二
越前　二首　負二
釈阿　三首　勝一　負二
隆信卿一首　持
通具卿ロ首　勝二　負二

[illegible]二首　持一　負一
保季卿一首　持一
家隆卿一首　負一
寂蓮　ロ首　持三　負一
[illegible]　一首　負一
季保　一首　負一

右

女房　七首　勝五　持二
度重　六首　勝三　持二　負一
檀大納言一首　負一

基宗　一首　持一　持一　頁一
宗經　三首　勝一　持一
範光　二首　勝一　頁二
高門　三首　持一
源波　一首　勝一　持一
丹後　二首　勝一　持一
定家卿　五首　勝二
雅經　一首　頁一
具親　一首　頁一
家長　一首　頁一

詞合　貞永元年八月十五夜

題　名所月

作者　左方　女房　後堀河院　藤中納定家
嵯峨院門　家隆　判　雅経卿
信實朝臣　秋民卿
雅光朝臣　秋季朝臣
隆祐　知宗

三位侍従母 後成女　　高倉 八条院官女

右方　　賀茂季久信

民部少輔典侍 後堀河院官女 為家卿女　　中宮少将 藤壁門院官女 左京太夫藤信實女

宮内卿局　　兼康

家長卿局　　原家清

下野 日吉祢宜元仲女 後鳥羽院官女

光俊卿局

右衛督為家

判者 権中納言定家

一番　左所月　　女房

左 後

三うさ山あらさけ月を八桂男乃いやとしのそふ月八もしし

右　　民部少輔典侍

桂男山そめてうつ後ふ木もとゝ思ふもしぬるよいはふ月新

たゝさ男乃いやとしのそ姿河水九信而及く由

各一同ゆ右上よ深てうつろふ梢と重て下にはゆ雨

ぬ心いるこゝろ也ゆ信ゆ心ん也ゆ月の名とゝあ

れよ〻右方陳ゆ雖信ゆ也とも左水同日海為後

二番　　権中納言定家

左 持

神風やこゝ也そ川乃こゝろよろ九八ゆく月の光ゆ〻ゆ

右　　高倉

見そめし又はなほうらん秋の夜乃うら風さゆるたもとみの江乃月
みもはてぬ河乃月の光をそへくらす一夜合はうらん為
よもあらしうらひ侍りと河乃名をとるまんことに絶へ
うらも侍らぬ事乃さはめつゝかうに侍らん位の
江乃月をめてゝ雅なるもとと侍るも京氣おもひ
やらるゝこの哥なるべし中

三番

左 お

新勅

ひさうらそふまの月よおとろをハ秋もなかるゝ乃さらぬ中山

右

問

夕とゝ乃あゝの浪ゝうゑんうゝ世ハやゝとゝまゝと出る月新
さらぬ中山たひよ出てあるの月乃光をへそうてう
秋のまもおとろかゝ河めはゝゝく真ある

お家門に家隆

宮内卿

乃ゝゝ各中ゆ乃ゝのとゝちやまゝゝ海乃西とゝゝふ
右三の乃ゝ乃ゝ新月乃いるふむゝるゝ河ゝゝ
くやゝ侍れハ又おゝゝた

四番

左

あゝ乃ゝこゝうひハ月をうゝかのひるふゝうれハあゝれゝうゝ

右 俊

資季卿

天の原ゝ井よゝ乃ゝ乃ゝの月をあゝてや雪もさゝんん
右ゝこゝうひハ月をうゝかとゝいゝる風信花宮ゝゝ
中侍ゝさゝ右方中云誠ゝんゝ乃ゝとゝふぱゝゝ侍れとあれ
ありうゝとゝいひゝてゝうゝ河ゝうゝ行ゝゝゝや侍ゝんをき
世乃ゝ乃ゝゝゝ乃ゝ乃ゝ風ゝたゝうゝふゝりの乃ハあゝれ
ありうゝとゝいゝうゝこゝ乃ゝにあゝゝくぱゝ侍ゝゝ中

伊勢とはいはのたはゆるさるとはいへとも
をとこ冨士のなをのはさきをとひとるまふ伊勢はいか
ゝ

五番

左　信濃歌

あまの月ちとりの浦の波のよ秋はいまをとはいふをもしらん

右　家持歌

新勅

いはくまもちりさけいまやこゝろ山まとゝいはてはいつる月新

あたの浦の秋風信あしく伊勢とはいはさをいまや

みさやとゝ唐うけてといつる浪ぬをあをとうけく月

新いはゝぬ所をくつよまつゝ海底塵芥の縁

六番

左　新民歌

[illegible]

續後撰

右　中宮内侍

とゝ人もいはゝとあるをとゝ結の中宮内侍

くもりなる紀伊の浦も秋の月ことたるは

弾ふゝくゝ伊勢を三縁のやとゝいとにもむ

むとゝるあゝぬさまふ艶よゆへをそゆゝるゝ

各中左をなをひよりとゝ泊いてをゝ人伊

右縁と宮ゝれ

七番

左　をゝ歌

おゝとゝやゝ秋のなゝ乃浦の切月ハこのゝをひゝゝ乃月ゝを

右縁　下野

[illegible]紀月ハゝゝの山ゝゝふ秋のゝゝ乃新をさゝをゝ

秋生舎今秋の系歌字ふかく侍るとて月ありあけ
月をみるこころ乃秋のあるゝ乃新をとゝ〳〵ゝ
をゆく侍る〳〵要おさまもろ〳〵こゝ也各中で侍
らに

八番

左 持

親季卿

をのゝ山ちゝみ乃まをゝ〳〵てゝ乃秋乃月

右

曼殿

いく秋の空り月をやゝにらんちからむあゝ乃神のうゝ波
ちはるむあゝ乃神のうゝ波踏ふよろ〳〵くなゝ侍
まゝとみゝこのやゝのちゝみひゝ乃をゝとゝ〳〵月不
及ふ非為持

九番

左

隆祐

乃をむさゝまゝて入江乃あゝちゝもゝてゝ月あるんゝと秋をゝゝ

右 持

実俊卿

雲をゝ乃秋むゝ山おゝ〳〵ゝ時よゝゝ月のれのゝゝゝにゝて月新
乃為さゝ非為書白乃あゝ也中以右為持

十番

左 持

知ふ

さゝゝゝとも雲ゝもいゝ〳〵ゝみゝゝ乃秋乃風をゝゝふ秋の月

右

源光清

たゝゝゝ山月のゝゝ乃下露ゝ秋のゝをゝをゝゝ月 出秋く
はゝゝふ秋の月ゝゝてゝゝ四月乃ゝゝの下露秋の
ま乃をゝゝふきゝゝ侍るゝ侍ふ要あるゝゝゝ人
侍て被處持不及見回ゝあゝゝ事いおゝの事ゝ侍るゝ

十一番
左　持　　　三位侍従母
萬代もみともあかじ川のよどみなくふたゝめぐる雲ゐ乃秋乃月かげ
続後撰
右　　　左衛門督為家
五十鈴河神代乃かはらぬ影とめて ことしもすめるイ 秋なかはなる姫の夜半の月
見るもたのし川をとめる雲井五十鈴河神代乃跡も清めむ
一つ為持
十二番
左　持　　　女房
ながめやる雁乃羽かぜの露のうへ月さへわたる雲井の橋かな
続拾
右　　　民部卿典侍
さえわたる月のひかりにせきもりもなにはのうらの秋乃なみ路
ながめやる雁の羽かぜ月さえわたるあまのうきはしたて
風情常氣殊勝耳於清見かたの月明結句難捨にとまり侍りしや持乃よし侍るか
十三番
左　勝　　　權中納言定家
代々をへてあふみぞさ乃山の秋の月たえぬ光もすみのぼるらし
右　　　高倉
水乃面にうつる月影乃いくたびにひかりあひぬ宇治乃橋姫
左歌優る勝負のことを思ひて上めるによりて月をあふぐ心をかけてもうつらぬ乃かげ姫いぬるかしく
ばかり侍らぬ但今よりのちも左の勝負によみなる
ひて詠社名假神威事殊可停止之由被仰
十四番
左　勝　　　前内大臣家隆

[illegible]

右　六番　朝臣

[illegible]

月乃[illegible]の月ん[illegible]の[illegible]

十五番

左　行能卿

[illegible]

右　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十六番

左　信實朝臣

[illegible]

右　[illegible]

[illegible]

十七番

左　[illegible]

[illegible]

右　中宮[illegible]

[illegible]

おもひて秀逸ときこゆるよし各称しかも中左宜
不及優劣為左勝
十八番
左　前参議為氏
さか川よ月のみかとさしき海乃みちある御代を神やしるらん
続後撰
ちる世山ゆつきかたしてもあらかれそこよひの月乃名にそかくる
右 勝　下野
左歌其雖可然にし世たちかへし右ゆつきかたしてをあらわれく月乃名にかなるに勝ふよろしきよし
各申為勝
十九番
左 持
たちそ手尺あしきのくめ海乃河風よ月もさそ風をとめる月かと
秋李為氏

右　兼康
めさ萩の花のまの露のゆきもちらずにぬまてうつろふ袖の月かな
たちかれの小野にとめる月河さ萩のむらきよらつ影に
露いつれともなくあはれしく侍る為持
二十番
左　隆祐
ゆふなきに和かの浦はなきむ月と花のこり家に影をみるかなれ
右 勝　光俊朝臣
まつしまや春たちて山の月と花てらひそあさの影はことなん
明石更科之月雖因左寄依下句宜為勝
二十一番
左　知家
よしさらて露おくらむむりとあらの萩のよちなるに武蔵野の月

右　勝　　源家清

からにしき山にそへてゆらのとを越かゝる月のかけ乃え

左初五文字猶有常之上右ゆらのとを越かゝる月殊宜によろし仍為勝

二十二番

左　　三位侍従母

露のおく霞乃中にうつる宮城野乃月かけあさの色は見えける

右　勝　　右衛門督為家

むかしみる秋のこよひの月よりもやゆらをゆかしの名によきかあるらん

宮城野乃月殊にすゝしく侍れと右歌乃名によきかあるらん一の勝と申侍

二十三番

左　勝　　女房

むこの浦やあまの小舟の絶まより漕出ていつる秋の夜半の月

持

右　　民部卿典侍

いくかへりきも夜の月かけ人はみる秋の秋にはおなし月を見るらん

左はよろしき歌とは侍らねと常の月よりやあまの小舟雲の絶まより漕出ける月をもなからめくりて而持

二十四番

左　　権中納言定家

月影は秋の夜ふかくすみよしの江のいりえにちとせふるあひおひの松

右　勝　　高倉

空はあれとくもらぬ月の秋をとそてらす人は月こそやとれ住吉の宮

住江月又能叶神社之感依見秋月殊入感之境仍為勝

二十五番

左　　藤原定家朝臣

あつさ河紅葉をまさる秋の波の月をさやけ
さ　　宮内卿

右　勝

月さやかあらふる雨の人もあらしてとひたる
紅葉はまさる秋の夕波　　後鳥羽院

たゆたゆ波の月の影　　宮内卿

二十六番

左　勝　　行能卿

續拾　　春の日山さくら乃さく紅葉とさいかの時代の光つ
月を　　賀茂重保

右

ぬるさかさく月は波せてや波の月の新もうつ
春乃柳緑帯代の光を足称美うつ月波の新
りさくら形各別事　　公経卿

二十七番

左　　行家卿

いとさくまさくこ家とかさしてさくらを乃ものの原の月をやかる
春也卿

右　勝

月つ代をめてもむ秋の月つもれとさくらかもさくの浦人
たさせるあやまり代ふねとさくをいるふやとや
人さくら代りさつをれとたれもさくれうら人姿
河めつくいとつてはのさくらを各や卿

二十八番

左　　教長卿

さくらをとの乃名の花の風よをとをれまさる秋の秋乃月
中立卿

右　勝

波乃ふるふをとの乃さとのあ一松月乃とてやむさいをあ人

左上句めつらしからぬ事に侍れハあし枕一の勝と定家

二十九番

左　　　　　　　　　　　　有長朝臣

紅葉ちる月のかつら乃河なみにふかくハなとかもとちるらん浪

右　勝　　　　　　　　　　下野

ゆくやまあら河さの夕暮月かはやとて浪松かうらしの海

左下句優なく侍り右夕煙たてぬんよ猶しき

よしやすて勝

三十番

左　　　　　　　　　　　　家季朝臣

なのふはえや志ふしみちくしくもこの月影よとろおきの河秋の世

右　勝　　　　　　　　　　道康

いく夜へく秋のこよひとちきるらんこゝろさのやまたいつる月影

左歌尤宜為勝

三十一番

左　持　　　　　　　　　　隆祐

あさ夜のかつらもかんとたむさし野や山なみ見えするすみける月影

右　新勅　　　　　　　　　光俊朝臣

もろ人のうきつらさもあきらしき霊乃なきしうれ持乃秋のよそれ月

志かのうら乃浪のうへし寄気瑕ぬよさよるし侍るや哉

花野の山あきさにてろハそ違なりてくさてえん侍れとこと

左方難ハ侍る能ハ為持

三十二番

左　　　　　　　　　　　　知家

あきのよハひとつよ見ん雲の浪のよるよ月まつ草の秋乃かる人

右　勝　　　　　　　　　　源家清

たゝ清輔朝臣の家にいくちもなきさらるゝよすがら月を
見て詠侍ける　前中納言定家
月だにすむらむ秋の空なれや
三十三番
左勝　三位俊成母
ゆらのとをあられも月のすまるるは秋のたかねの
右　左兵衛督為家
ゆゝしまやをさゝひろふ乃たかねふるよすがらみちゝる秋の空の月
ときゝひろふ月の光こそちりゝ　ちりゝ拾ふと
俊の江の雪よ雪ふるさ月京氣珠よおもしやゝ
ゝゝ中て勝とす

女房　勝二　持一
定家卿　勝一持一負一
為隆卿　勝一持一負一
行能朝臣　勝一負二
信實朝臣　勝一負二
教長朝臣　勝一負二
為家朝臣　負三
教定朝臣　勝一持一負一
隆祐　持一負二
知家朝臣　持一負二

民部卿典侍
高倉
宣旨朝臣
賀茂朝臣
赤染朝臣
中宮内侍
下野
藤原康
光俊朝臣
源氏清

三位伯母 彩一 初一頁一